

病害虫発生予察予報第11号（2月の予報）

佐賀県

目次

1. 2月の病害虫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 気象概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
3. 予報の内容・根拠等について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
4. 2月の予報
 野菜（イチゴ、ナス、キュウリ、トマト、タマネギ）・・・・・・・・ 3
 花き（キク）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 1
5. 病害虫診断状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 2
6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫・・・・ 1 3
7. 農薬の適正使用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 4

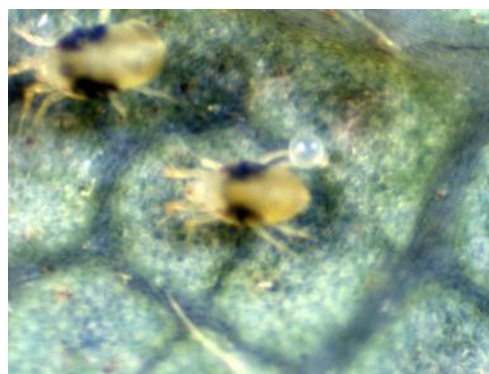
今月のトピックス

- タマネギべと病の越年罹病株の早期発見、抜き取りを徹底しましょう。
- イチゴのうどんこ病、ハダニ類が多発生しています。このままでは春先に大発生する恐れがあります。冬季の防除を徹底しましょう！

1. 2月の病害虫（予報で対象とした病害虫の中から抜粋）



イチゴのうどんこ病



イチゴのハダニ類



タマネギべと病の越年罹病株



キクの白さび病

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成27年1月23日 福岡管区気象台発表】

2月 平年と同様に曇りや雨または雪の日が多い見込みです。

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の向こう1か月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

上記の気象予報（確率予報）の内容について、本文中では便宜上、「気温並」、「降水量並」と簡略的に表現しています。

2月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	30	30	40
降水量	30	40	30

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
2月の平均気温	6.7℃	-0.7℃ ~ +0.6℃
2月の降水量	77.5mm	74% ~ 109%

3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量（平年比）

○予報の発生量は平年（佐賀県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査時の各作物の生育状況の写真を掲載しています。

4. 2月の予報

野菜

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびき記載頁	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (本圃)	うどんこ病	多	多	188～191	平成27年1月29日付 病害虫対策資料第 22号参照
	灰色かび病	並	並	191～193	
	ハダニ類	やや多	やや多	199～200	平成27年1月29日付 病害虫対策資料第 22号参照
	アブラムシ類	並	並	204～205	
ナス	すすかび病	やや少	並	234～235	
	灰色かび病	並	やや多	232～234	
	菌核病	並	並	235	
	アザミウマ類	並	やや多	244～245	
	コナジラミ類	やや少	並	243	
	ハモグリバエ類	やや少	並	246	
キュウリ	べと病	並	並	166～168	
	うどんこ病	並	並	173～175	
	褐斑病	並	並	170～172	
	アザミウマ類	やや多	並	148～149、183～184	
	コナジラミ類	並	やや少	145～147、181～182	
トマト	灰色かび病	やや多	やや多	210～212	
	葉かび病	並	やや多	216～217	
	コナジラミ類	並	並	145～147、219～222	
	ハモグリバエ類	並	並	154～155、223	
タマネギ	白色疫病	並	並	272～273	
	べと病	やや多	並	273～275	平成27年1月29日付 病害虫対策資料第 21号参照
	ホトリフ葉枯症	やや少	並	275	
	ネギアザミウマ	並	並	280～281	

【特記事項】

【イチゴ】

1. イチゴうどんこ病の発生圃場では、発病果実等を除去し、硫黄粒剤のくん煙処理を併用するなどして防除を徹底する。薬剤防除の際は、葉裏や株の内部にも薬液がかかるよう、十分量を丁寧に散布する（[平成27年1月29日付病害虫対策資料第22号参照](#)）。
2. ハダニ類の発生がみられる場合には早急に防除を行う（[平成27年1月29日付病害虫対策資料第22号参照](#)）。特に、天敵を用いて防除を行う圃場では、防除を徹底し、ハダニ類の発生が認められない程度に密度を抑えてから天敵を導入する。
3. アザミウマ類の発生が見られる圃場では、春先の多発生を防ぐため、冬期間に防除を徹底する。

【施設果菜類（ナス、キュウリ、トマト等）共通】

1. コナジラミ類やアザミウマ類は、多発生すると防除が困難であることから、冬季の防除を徹底する。圃場においてこれらが媒介するトマト黄化葉巻病やキュウリ黄化えそ病・退緑黄化病等のウイルス病の発生がみられる場合には、伝染源となる発病株は早急に抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。
2. 病害の発生を防止するため、こまめな換気や循環扇を活用するなどして、適切な温湿度管理を行い、結露時間の短縮に努める。

【タマネギ】

1. 近年、タマネギべと病が多発生傾向にある。本年、すでに発病株（越年罹病株）が認められている。病原菌の伝染が本格的に始まる3月までに伝染源となる発病株の早期発見と抜き取り、早期防除を行う。特に昨年発生が多かった圃場、地域では徹底する（[平成27年1月29日付病害虫対策資料第21号参照](#)）。

【アスパラガス】

1. 褐斑病等の次作への伝染源対策として、栽培終了後に刈り取った茎葉は必ず圃場外へ持ち出して処分する。さらに、土壌表面を焼くなどして病気や害虫の圃場内での越冬を防止する。

イチゴ（本圃）

（巡回調査：1月21日～23日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

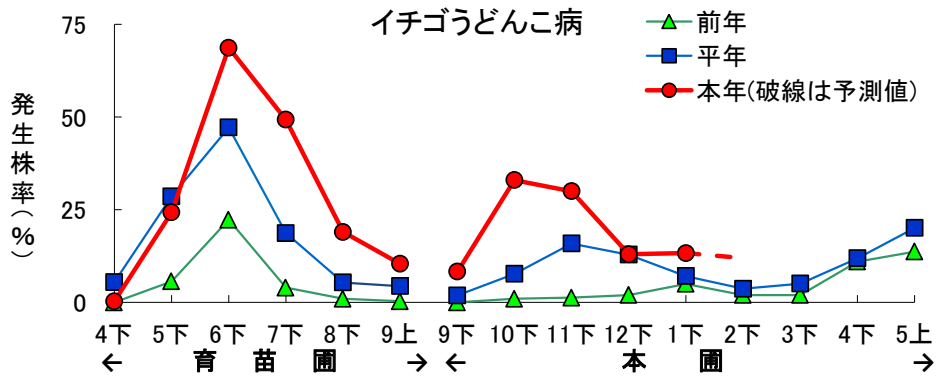
発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は13.3%（平年7.1%、前年5.0%）であり、平年および前年より多い。〈+〉
- (2) 今作では、育苗期から本圃初期に本病の発生が多く推移したため、圃場内での菌密度は高いと思われる。〈+〉
- (3) 病害虫防除員の調査(6圃場)では、4圃場で発生がみられ、発生株率は3.0%である。〈-〜±〉
- (4) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 詳細な防除対策は[平成27年1月29日付病害虫対策資料第22号](#)を参照する。



2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は17.7%（平年10.5%、前年6.0%）であり、平年および前年よりやや多い。〈±～+〉

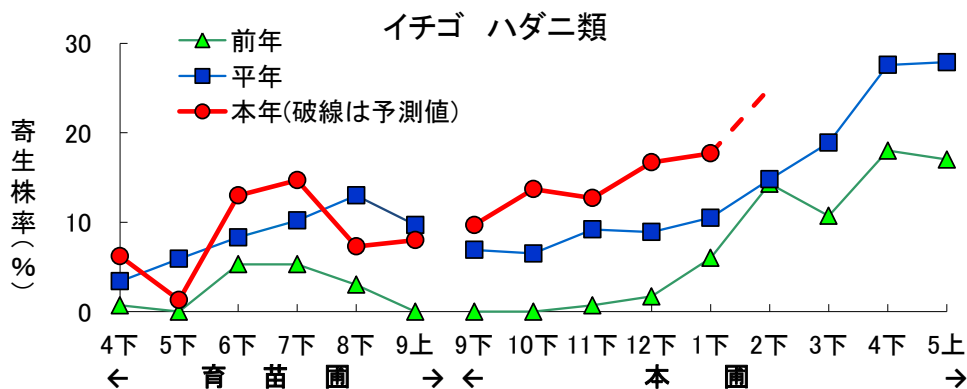
(2) 病害虫防除員の調査（6圃場）では、6圃場とも寄生が見られ、寄生株率は11.2%である。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 詳細な防除対策は [平成27年1月29日付病害虫対策資料第22号](#) を参照する。



ナス（促成）

（巡回調査：1月19～21日）

1. すすかび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は7.5%（平年17.4%、前年4.4%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉

(2) 病害虫防除員の調査（4圃場）では、1圃場で発生が見られ、発生株率は2.5%である。〈-～±〉

(3) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

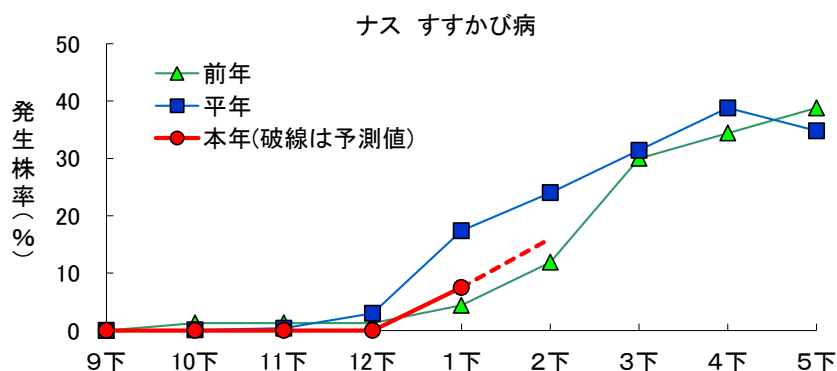
3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生初期からの防除を徹底する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



巡回調査時の生育状況



2. 灰色かび病

1) 予報の内容

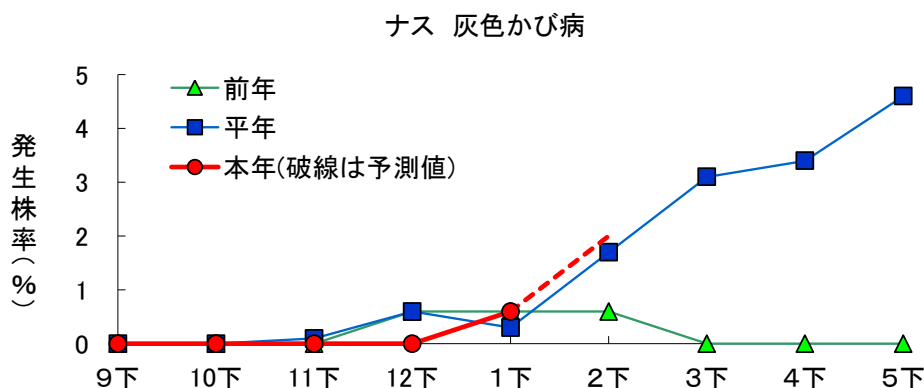
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は0.6%（平年0.3%、前年0.6%）であり、平年よりやや多く及び前年並である。〈±〜+〉
- (2) 病害虫防除員の調査（4圃場）では、2圃場で発生が見られ、発生株率は2.5%である。〈+〉
- (3) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。
- (2) 発病部位は除去し、圃場外へ持ち出し適切に処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



3. アザミウマ類

1) 予報の内容

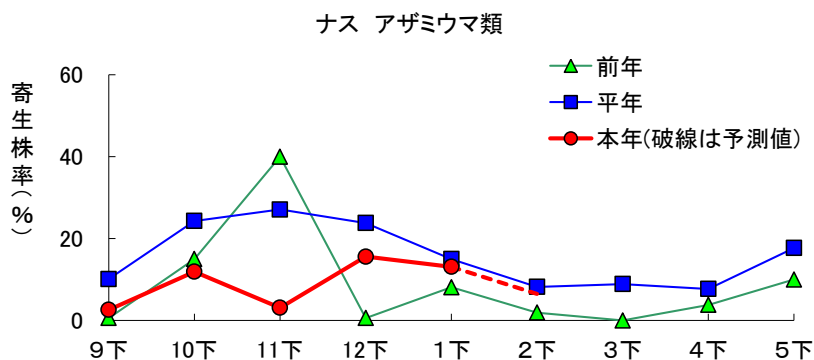
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は13.1%（平年15.0%、前年8.1%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉
- (2) 病害虫防除員の調査（4圃場）では、1圃場で発生が見られ、寄生株率は2.5%である。〈-〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



4. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は2.5%（平年19.1%、前年0%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉

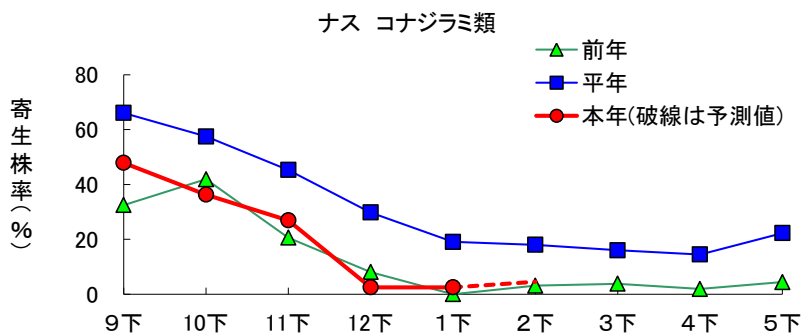
(2) 病害虫防除員の調査（4圃場）では、1圃場で発生が見られ、寄生株率は2.5%である。〈-~±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設内の密度を下げるため、幼虫寄生葉は可能な限り除去して、施設外へ持ち出して適切に処分する。

(2) 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



キュウリ(半促成)

(巡回調査：1月22日)



巡回調査時の生育状況

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

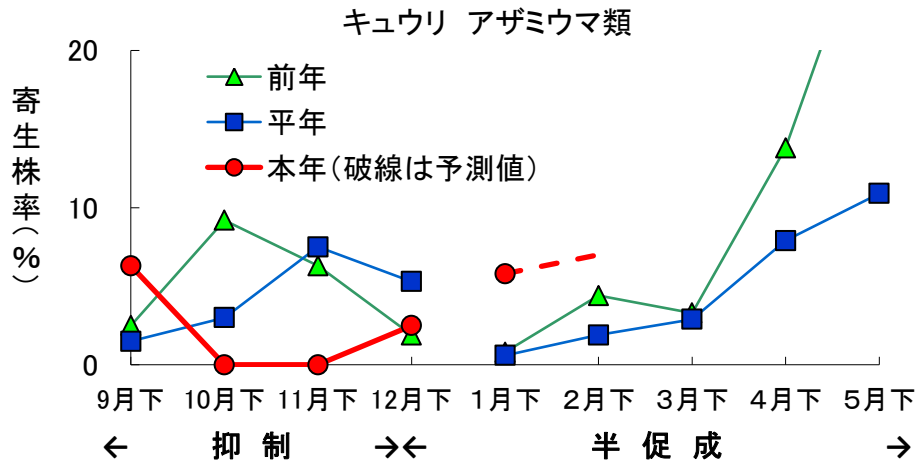
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は5.8%（平年0.6%、前年0.8%）であり、平年および前年より多いが、寄生が認められるのは一部の圃場である。〈±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、発生初期からの防除を徹底する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



トマト

(巡回調査：1月21日～23日)



巡回調査時の生育状況

1. 灰色かび病

1) 予報の内容

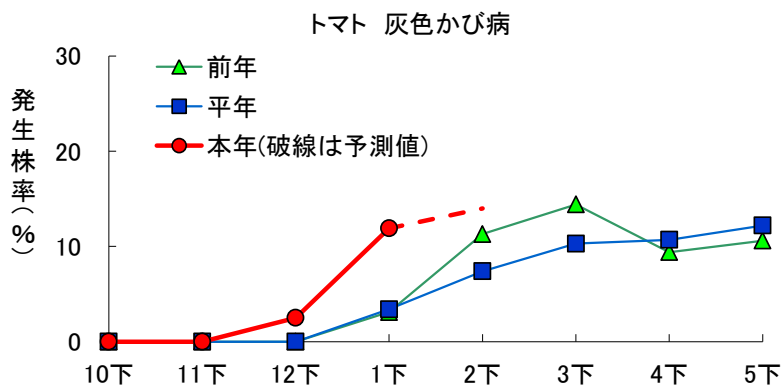
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は11.9%（平年3.4%、前年3.1%）であり、平年および前年より多いが、多発生圃場は一部に限られる。〈±～+〉
- (2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、発生を認めていない。〈±〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発病葉は除去し、発生初期からの防除を徹底する。
- (2)こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。
- (3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. コナジラミ類

1) 予報の内容

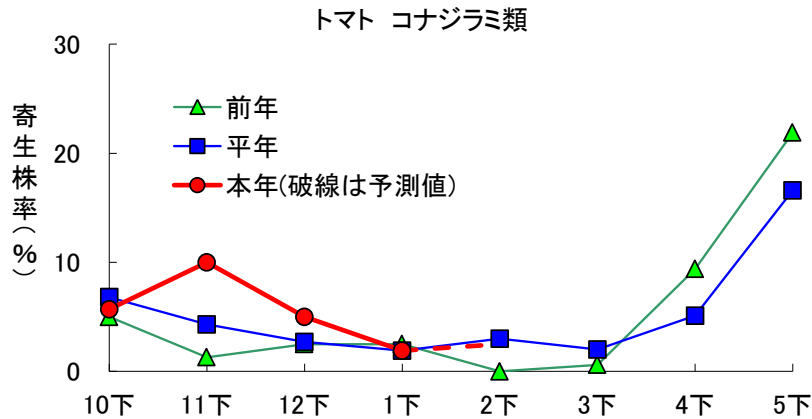
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は1.9%（平年1.9%、前年2.5%）であり、平年及び前年並である。〈±〉
- (2)病害虫防除員の調査（6圃場）では、1圃場で寄生が見られ、寄生株率は1.7%である。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) コナジラミ類はトマト黄化葉巻病を媒介するため、防除を徹底する。
- (2) 幼虫の寄生が多い葉は除去処分し、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



タマネギ (本圃)

(巡回調査日：1月26日)



巡回調査時の生育状況

1. ベと病

1) 予報の内容

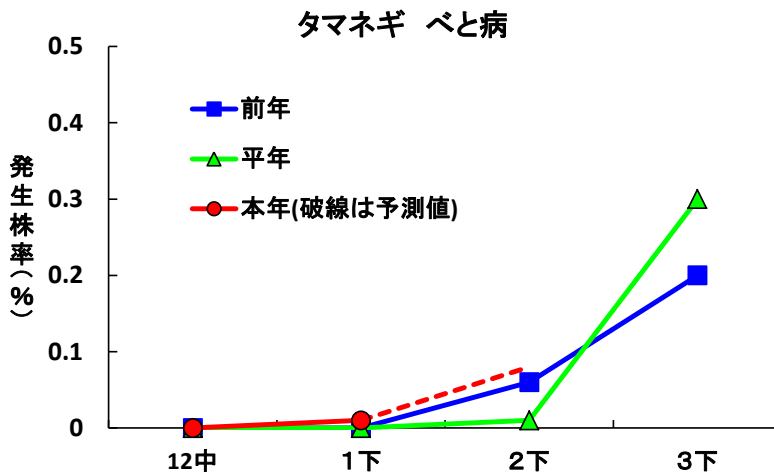
発生量：平年よりやや多い (前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率0.01% (平年0%、前年0%) であり、平年および前年よりやや多い。〈±~+〉
- (2) 近年、べと病が多発していることから、前年度に多発生した圃場や地域を中心に病原菌の密度が高まっていると考えられる。〈+〉
- (3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病株 (越冬罹病株) の早期発見と抜き取りを行う。
- (2) 発生初期のうちに速やかに薬剤散布を実施する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (4) 詳細な防除対策は [平成27年1月29日付病害虫対策資料第21号](#) を参照する。



2. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

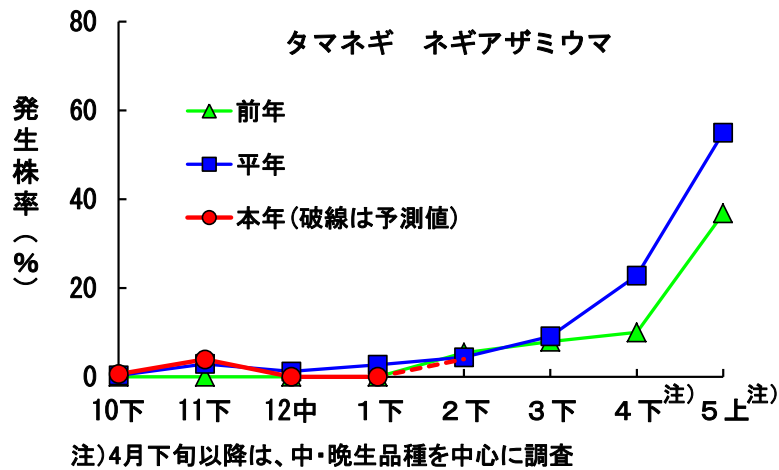
(1) 巡回調査では、寄生を認めていない（平年2.7%、前年1.0%）。〈一～±〉

(2) 気象予報では、並発生条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本虫は薬剤がかかりにくい葉の隙間に寄生しているため、薬剤が十分かかるよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統の薬剤を連用しない。



花き

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびきの記載 ページ	備考
		平年比	前年比		
キク (4～5月 出荷タイプ)	白さび病	並	少	343～344	
	アザミウマ類	並	並	348～350	
	アブラムシ類	並	並	346～347	
	ハダニ類	並	並	347～348	
	ハモグリバエ類	並	並	351	

【特記事項】

1. 白さび病は発病してからでは防除が難しいため、薬剤の定期的な散布による予防防除を行う。また、暖房機による送風や循環扇を活用するなどして、適切な温湿度管理に努める。
2. アザミウマ類はキクえそ病、茎えそ病を媒介するため、低密度時からの防除を徹底する。また、伝染源となるこれらのウイルス病発生株は抜き取り、圃場外で適切に処分する。

キク

(巡回調査：1月16～23日)



巡回調査時の生育状況

1. 白さび病

1) 予報の内容

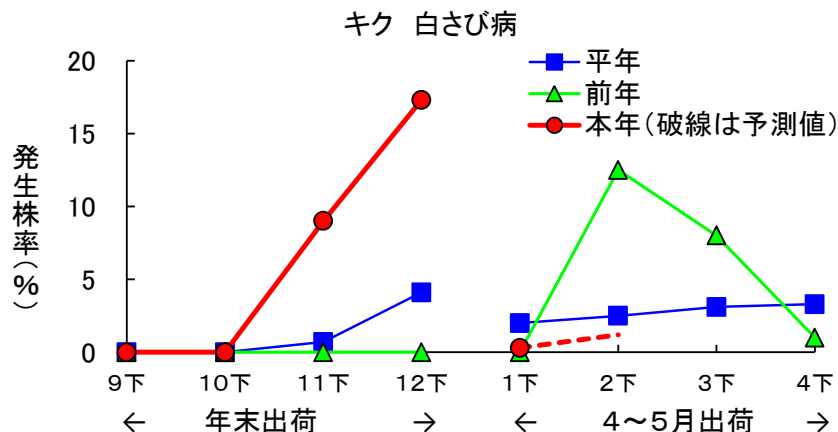
発生量：平年並（前年より少ない）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は0.3%（平年2.0%、前年0%）であり、平年よりやや少なく前年並である。（－～±）
- (2) 気象予報では並発生の条件となっている。（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病してからでは防除が困難となるため、予防散布に努める。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるように丁寧に散布する。
- (3) 暖房機による送風や循環扇を活用するなどして、適切な温湿度管理に努める。



5. 病害虫等診断依頼状況

平成26年12月21日～平成27年1月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

	作物名	依頼件数	診断結果(件数)
果樹	かんきつ	1	ヤノネカイガラムシ
	計	1	
野菜	イチゴ	3	炭疽病(1)、疫病(1)、生理障害等(1)
	キュウリ	5	黄化えそ病(2)、菌核病(1)、生理障害等(2)
	スナップエンドウ	1	ナモグリバエ(1)
	タマネギ	5	苗立枯病(1)、生理障害等(4)
	トマト	3	萎凋病(2)、すすかび病(1)
	ハクサイ	1	生理障害等(1)
	パレিশョ	1	そうか病(1)
	ブロッコリー	1	花蕾腐敗病(1)
	わさび菜	1	菌核病(1)
	計	21	
花き	カーネーション	1	萎凋病(1)
	ヘリクリサム	1	灰色かび病(1)
	計	2	

合計： 12 作物
24 件

内訳

糸状菌による病害	: 10件
細菌による病害	: 2件
ウイルス・ウイロイドによる病害	: 2件
害虫類	: 2件
線虫類	: 0件
生理障害等	: 8件
合計	24件(糸状菌と細菌の混発含む)

6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に12月20日～1月23日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）

発信元	内容	日付	作物	病害虫名
宮崎県	注意報	2014/12/24	イチゴ	うどんこ病
宮崎県	注意報	2014/12/24	イチゴ	ハダニ類

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）

発信元	日付	作物	内容
大分県	2014/12/25	シソ	シソモザイク病（PMoV）
北海道	2015/01/16	てんさい	褐斑病（QoI 剤耐性）

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）

発信元	日付	作物	内容
佐賀県	2014/12/25	イチゴ	ハダニ類の冬季防除の徹底について
長崎県	2015/01/15	きゅうり	ミナミキイロアザミウマの防除対策について
佐賀県	2015/01/20	キウイフルーツ	かいよう病の冬季の薬剤防除の徹底について
佐賀県	2015/01/20	茶	冬期のチャトゲコナジラミ対策について
福岡県	2015/01/20	イチゴ	うどんこ病及びハダニ類の発生について

注：太字は佐賀県で発表されたものを示す

7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

農薬を使用する前に、ラベルの内容を確認しましょう！

- ①使用できる作物か？
- ②使用濃度は？
- ③使用時期は？（いつまで散布できるか）
- ④総使用回数は？（何回まで散布できるか）

みらんばよ！



③名前や形が似ていても農薬の使い方が違う場合があります、注意が必要です！

名前や形が似ていても農薬の使い方が異なる農作物があり、残留基準値を超過する事例がみられています。

似ていても農薬の使い方が違う農作物の特徴

1. 名前が似ている場合
2. 形態が似ている場合
3. 同じ作物だが、収穫部位が違う場合
4. 同じ作物だが、収穫時期が違う場合

間違いやすい農作物



作物名1	作物名2	作物名3	上記の特徴番号
ブロッコリー	茎ブロッコリー		3
トマト	ミニトマト		1・2
ねぎ	わけぎ	あさつき	2
キャベツ	メキャベツ (子持ちカンラン)	非結球メキャベツ (プチベール)	1
しゅんぎく	きく	食用ぎく	1
えだまめ	だいず		4
にんにく	葉にんにく		3
未成熟とうもろこし	ヤングコーン (ベビーコーン)		4
たまねぎ	葉たまねぎ		3

判断を迷った場合は、最寄りの農業改良普及センターにお尋ねください。

(佐賀県・佐賀県植物防疫協会作成パンフレットから抜粋)